

滋賀県立琵琶湖博物館協議会 令和4年度第1回会議

日 時 令和4年(2022年)7月13日(水)

13時10分～15時33分

場 所 琵琶湖博物館1階セミナー室

会 議 次 第

1 開 会

2 議 題

(1) 第三次中長期基本計画令和3年度評価について

(2) その他

3 閉 会

1 開 会

○司会（副館長）：定刻でございますので、ただいまから滋賀県立琵琶湖博物館協議会、令和4年度第1回会議を開催いたします。

開会に当たりまして、館長の高橋よりご挨拶申し上げます。

○館長：失礼します。

皆様、本日もお忙しい中、令和4年度第1回琵琶湖博物館協議会にご出席いただきまして、ありがとうございます。

龍見委員はリモートということで、私、小さくて見えないでしょう。見えますか。ちょっと小さくて見えないかもしれませんが。

本日の協議会では、現在進めております琵琶湖博物館の中長期計画、その中で昨年度、令和3年度の活動を行いまして、内部評価を行いました。これは当館から皆様方にご説明させていただきまして、ご質問ですとか、ご意見を頂戴いたしまして、外部評価につなげていきたいというふうに考えております。

中長期計画におきましては、これまで皆様方に、理念的なことでありまして、あるいは概略的なことをお示してきたわけでございますけれども、私たち自身もあまり簡単なものと、計画がうまく進んでいるのかどうか、どう進めていいのかが分かりませんし、また皆様方も評価する上でお困りになると思ひまして、今年度に入ってからでございますけれども、これまでの考え方を整理して、それぞれの項目について以前よりは少し詳しく、具体的な計画を示すようにいたしました。

本日は、こうした計画に基づいて、昨年度の内部評価についてご協議をいただきたいというふうに考えております。評価していただくに当たっては、個々の細かい事業の評価というよりは、私たちが今後、5年後、10年後を進めていくにおいて、今の方向でいいのか、もっといい方法があるんじゃないか、そういったことをご助言いただければありがたいと思ひます。また、評価については点数をつけるというよりも、さらによりよい博物館をつくっていくにはどうしたらいいかというようなことを、委員の皆様方にも一緒に考えていただいて進めていければありがたいというふうに思っております。

その意味では、伴走型の外部評価というのが琵琶湖博物館ならではの新たな評価方法として今後進めていくわけでございますけれども、こういった方法も初めてやることで、皆様方と一緒に協議しながら進めていけたらというふうに思っております。

どうぞ本日の協議、よろしくお願ひいたします。

○司会（副館長）：せっかくですので、澤田委員に自己紹介をお願いしたいと思います。

○委員：今ほどご紹介いただきました米原市立双葉中学校校長の澤田と申します。

平素は学校教育に多大なるご支援とご協力をいただいております、大変ありがたく思っております。特に、コロナ禍の中で修学旅行の見直しを小中学校、これまでずっとしてまいりました。その中で県外への旅行先を県内に変えまして、その中に博物館を取り込んで、修学旅行で環境教育を中心に学習していくというようなことが進んできたように思います。今後どうなるか分かりませんが、このようなご縁をいただきましたので、私なりにまたしっかりと協力をしてまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

○司会（副館長）：ありがとうございます。

その他の委員の皆様には、引き続きよろしくお願い申し上げます。

では、議事に入ります前に、2点ほど確認をさせていただきたいと思います。

まず、定足数でございますが、この委員会の委員数は15人でございますけれども、本日、龍見委員も含めまして、今、14人がご出席かと思っております。定足数に達しております。したがって、条例の規定により、会議は成立しております。

それから、資料の確認をさせていただきたいと思います。

お手元の次第の下に、配付資料一覧と書いておりますけれども、まず説明資料としまして、「令和3年度の事業評価を行うにあたって」という1枚物の紙と、その後ろに、「外部評価記入票」という様式がついているかと思っております。それから、資料1、資料2、資料3、資料4というのがあるかと思っておりますので、ご確認いただきたいと思います。

そのほか、龍見委員にはまだ届いてないと思っておりますけれども、会場の皆様のところには、補足資料というのがあるかと思っております。

以上が本日の資料でございますので、ご確認をお願いしたいと思います。

よろしいでしょうか。

それでは、条例の規定によりまして、この後の議事の進行は、会長をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

2 議 題

(1) 第三次中長期計画令和3年度評価について

○会長：皆さん、こんにちは。

事前の資料にも目を通していただいているということも含めて、今日は本当にご苦労さまです。お集りいただきまして、ありがとうございます。

今日の議題は、令和3年度評価についてということになっております。ただ、評価そのものについては、事前にお送りしました「外部評価記入票」というものがありまして、こ

の後、各委員の皆様にご記入をさせていただくことによって評価を進めていただくということになりますので、この場で評価の議論をするというよりは、今日は内部評価について館のほうで既にされていますので、その内容についてご説明をいただいた上で、この後、どういう進め方をしていこうかという相談をさせていただきたいというふうに思っているところです。

それでは、館のほうから内部評価についての説明をお願いします。

○事務局（企画調整課）：事前に皆様宛てに資料をお送りさせていただいております。「令和3年度の事業評価を行うにあたって」というお願いの文章と、資料1・2・3・4というのは、資料1に関しては、以前から出ています中長期基本計画という冊子です。

資料2が、その目標をどういうふうにして実現していこうとしているのかというような、その方向性と実際に行う事業との関係を、こういうふうに考えていますという説明の文章です。その図がその後ろについています。

資料3は、これも以前、多分お渡ししていますね。10年計画でこの第三次中長期基本計画というのを考えているんですけども、今後5年間はこういうようなスケジュールで実施していきますよというような計画です。この5年間の部分に関しては、実際に行っている事業と内部評価と皆様からいただける外部評価を基に、毎年見直しをしていくというような内容のものに当たります。

最後の資料4が去年度、令和3年度に実施した我々の活動に関して、内部としてはこういうふうに評価をしていますというような内部評価の資料ということになっています。

これについて、事業については重点事業という形で17個の重点事業があるんですけども、それぞれ全ての重点事業について各年度に実施した内容について点数をつけるということではなくて、それら重点事業が6つの事業目標というものに結びついていきますので、6つの事業目標のそれぞれに対して評価をするというような形で進めていきたいというふうに考えています。

それについて、実際に私たちがやろうとしている事業と目標とをどういうふうに結びつけていくかというような考え方について、少し説明をさせていただきたいと思います。

お手元の補足資料のほうにも同じ内容のものがあるかと思いますが、前の画面が見にくいという方は、お手元の資料を見ただけであればと思います。

前回の3月の協議会のときにご議論いただきました。その中でそれぞれの事業について点数をつけてもらったほうが外部評価をしやすいというようなご意見も伺ったんですけども、そのときに前任の芳賀のほうからも説明がありましたが、毎年度の計画の中でどれぐらい実行できたかというのを、例えば何%できたというような評価をしてしま

うと、実現できそうな事業計画ばかりを（博物館側が）挙げてしまって、本当に目標とする到達したいところへ到達できないというような懸念がありますので、我々としては到達しようとしている目標に対して、どれぐらい自分たちは前へ進めているのか、それとも全然違う方向を向いているのかというようなことを、内部評価と外部の方から評価を得たいということで、数値目標については毎年度はやらないというようなやり方で評価をしていきたいです。ただ、この中長期計画は10年間で行おうとしていますので、5年ごとにその方向性にちゃんと向かえているのか、5年間でどれぐらい前へ進むことができたのかという評価に関しては、また別途行いたいというふうに考えています。ただ、その評価の数値目標に関しても、まだ現在検討中ですので、こちらはこの計画を進めながら、どういうふうに評価していくかということも含めて検討していきたいと考えています。もしよければ、そのことについてもご意見をいただければありがたいと思っています。

もう一つ、印象に残っているご意見としましては、去年度やったことをこの時期に外部の人に協議会で説明して、その後、外部評価で計画を見直すのでは遅いのではないかとのご意見もありました。そのことに関しても、目標としている10年後の社会の姿とか、琵琶湖博物館が向かおうとしていることについて、毎年度の計画はもちろん見直していくんですけども、もう少し長いスパンで、長い目で、こういうふうに進めていくべきじゃないか、こういう方向を向くべきじゃないかというようなご意見をいただきながら、計画を進めていきたいと考えていますので、この時期でいただいたものですぐまできることに関しては、計画に生かしていき、もう少し長い視野で見て、方向性を変えていくというようなご意見に関しては、次年度以降の計画というところで見直す材料にさせていただきたいと考えています。

概念図で申し訳ないんですけど、補足資料のほうにも図があります。

右上のほうに目標があって、この目標に向かって進んでいきたいというときに、我々は内部評価としてこちらに進んでいる。それに対して外部評価として、ああ、こっちに進んでいるんですねというふうに意見が一致する場合もあります。

こっちに進もうとしたら、これは概念的な障壁ですけども、これは何か分かりませんが、コロナかもしれません。そういった障壁があった場合に、真っすぐ進めなかったから、この障壁のために、こういう迂回をしましたという内部評価をする場合もあります。そのことについて、本当は真っすぐ進むべきだっただろうけれども、内部の人がこれが障壁になって、こういうふうに迂回したというふうに考えているんだとしたら、この障壁は実際あるし、しょうがなかったよねというような、ここでもその説明を受け

ることで、目標に向かえているという意見が一致するという場合があると思います。

実際に中で活動していると、方向性をだんだん見失って行って、ぐにやぐにやといろんな方向に行きながら、変な方向に行ったり。自分たちとしては目標にちょっとでも近づいたなというふうに見ているわけですが、外部からすると、全然意味なくぐるぐる回っているんじゃないのか、方向性をちょっと見失っているんじゃないの、本当はこっちに向かいたいと思っているんじゃないのというような意見があるかもしれません。真っすぐ近づけた場合も、これだけ近づいたんだというふうに内部が評価していても、もっと近づいているよ、もっと自信を持ってやってくださいというような評価の仕方があるかなというふうに思います。

こんなふうに、協議会の皆さんが外側から見た目と内部の評価が合っている場合もありますが、内部の評価と外から見た目が全然合っていないという場合には、私たちの目を正していただくというようなことで、こういうことが伴走型で進めるという意味だというふうに解釈をしております。

ですから、共通の目標というもの、私たちがどこへ向かって歩もうとしているのかというようなことを、皆さんと我々、関係者全員が一致した考えを持っていなければなりませんので、その目標について少しご説明したいと思います。

これはもちろん、基本計画以前にお配りしている冊子、資料1に当たるものにかかれていたものなんですけれども、琵琶湖博物館としては使命があります。その使命が一番上位にあって、その使命を達成するために、基本的な理念として、「湖と人間」というテーマを持っていて、フィールドへ誘う場になっていて、交流の場となるという、その3つの基本理念で活動しています。ここは大前提としながら、その下に今回の第三次中長期計画というものがあるというふうに考えております。

第三次中長期計画では、我々は何を目指しているかという、これも基本計画の中に書かれている文章です。「多くの人が琵琶湖とともに生きることの価値を感じることができ、その幸せが将来にわたって継承されていく社会。誰もが日常の中で湖との暮らしのより良いあり方を探究・実践でき、その成果を多くの人と共有する機会を持っています。また、さまざまな人々が出会い、学びあうことで新たな発見や活動の持続が可能になっています」というのが、琵琶湖博物館が目指している10年後の社会です。

これは皆さんにご理解いただいて、中長期基本計画として去年度からスタートしている内容なんですけれども、ここへ向かうのに我々が実際にやる事業をやりながら、ここにどうやって向かっていくのかという、その道筋、筋道をはっきりさせる必要があるというふうに考えました。

これをどうやったらここに進めるのかということで、一番上の2つの文章が本当に目指している社会です。こういう社会というふうに体言止めしていますけども、この社会を目指すということです。その下にある2つの文章は、皆さん、地域の方々ができる内容、皆さんが共有する機会を持っているとか、持続が可能になっているというような、できることがこの2つというふうになっています。

ですから、これが一番大きな目標で、この目標を達成するために、地域の方々、琵琶湖博物館を使う方ができると、その要素としてこの下の2つの文章があるというふう読み解けます。そこから実際に我々が行おうとしている事業から、どうやってその一番上の部分、10年後の目指している社会へ向かうことができるのかというようなことがここに書かれているものです。資料としては、資料2に当たるものです。

長くなってすみませんが、ここはすごく重要な部分ですので、もう少しお付き合いください。

一番重要な、最終的に目指している社会です。10年後の社会は、「多くの人が琵琶湖とともに生きることの価値を感じることができ、その幸せが将来にわたって継承されていく」、そういう10年後の社会を目指します。その社会を目指しながら、全ての事業をやっていくということです。

ですが、ここに直接的にそれぞれの事業を結びつけていくというのは考え方として難しいと思いますので、この社会を実現するために、その下の3つの部分、「誰もが日常の中で、湖との暮らしのより良いあり方を探究できる」こと。「さまざまな人びとが出会い、学びあい、多くの人と共有・実践する機会を持てる」という状態。「湖と人間を考える人びとの活動が持続的に行える」という、その3つの要素が集まることによって、一番上の「多くの人が琵琶湖とともに生きることの価値を感じることができ、その幸せが将来にわたって継承されていく」という社会になれるのではないかというふうに考えます。

その3つの要素にはさらにそれぞれ2つずつの要素があり、それが事業目標1・2・3・4・5・6に当たるものです。

というふうに考えていくと、17個の重点事業があるわけですが、それぞれの重点事業が事業目標1・2・3・4・5・6のいずれかに要素として入っていますので、それぞれの事業をやるに当たって、その事業は事業目標1を目指す、事業目標2を目指すというような形で、実際にやっていく重点事業に関して、ほかの事業に関してもですけども、事業目標のどれに当たる部分を我々が今やろうとしているのかというようなことが、最終的に向かおうとしている10年後の社会ということにつながるんだというふうに

考えて、事業を進めていくということになります。

ですから、17個の重点事業がそれぞれ事業目標1から6のどれかに当たっているわけなんですけれども、それらが今年度はこういう計画でやりますと。5年間計画を立てていますけれども、5年間の計画の中でどういうふうに年度計画をやっていきますと。それをやることによって、事業目標の1とか2とかというのが実現できるんだというような、その方向を目指して実際にやっていくというようなことをやっていきたいというふうに考えています。

さらに、ちょっとややこしい話で申し訳ないんですけども、資料2のところ、この図がありますけれども、重点事業1から17までの事業に関しては、それら全てが事業目標1から6のどれかに当てはまっています。それが事業目標のそれぞれの目標を達成するための事業、パーツということになっています。

この表の一番左に書いているのが実際にやろうとしている事業の内容です。取りあえずは5年間の計画を立てていますけれども、10年間計画を立てながらやっていくと、その次の段階です。例えば1-1ですと、実際にやろうとしている事業に関しては、「世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究計画の実施」なんですけれども、それを10年間やると、「複合分野における研究プロジェクトが企画される」というような状態ですね。それが10年後に我々ができていることです。それを実施することによって、「湖と人間の関係を考えるための複合分野における新たな視点が提案されている」、それは琵琶湖博物館からかもしれませんし、それに関わる外部の研究者からかもしれません。それが社会的にこういう状態になっているというような、この1-1の重点事業に対する10年後の評価の基準になります。

事業目標1に関しては、1・2・3という3つの重点事業をそれぞれのパーツを集めることによって、事業目標1の10年後の目標として、「琵琶湖研究を中心とした湖と人間の研究が推進される」という状態です。これは琵琶湖博物館からかもしれませんし、外部の研究者が琵琶湖の研究に関わることによって、こういう社会になっているというような状態を目指すということです。

ですから、重点事業は17個あるんですけども、評価としては事業目標の1・2・3・4・5・6それぞれに対して、あなた方というか、私たちですけども、琵琶湖博物館は全然進めてないですね、少しは進めましたね、内部の評価はちょっと甘過ぎるんじゃないですか、とかというようなことを皆さんからご意見をいただきたい。それプラス、ちょっと考えが甘過ぎますよという場合は、もっとこうしたほうがいいんじゃないかというようなご提案もいただければありがたいというふうに考えています。それが1・2・

3・4・5・6というそれぞれの事業目標について、このように考えているという資料です。

ここまでよろしいでしょうか。私たちが目指している方向というのは、以上で理解していただけましたでしょうか。

まずはここまでで、ご質問があればと思うんですけども、いかがでしょうか。

○会長：じゃ、ちょっとここで区切りたいと思います。

今のご説明に対して、皆さんのほうからご質問がありましたら、よろしくお願ひします。委員、どうぞ。

○委員 多分、言葉の使い方だと思うんですけども、ある程度こういう事業目標とかに慣れている者は、アウトプットとか、アウトカムという表現は分かると思うんですけど、これはなかなか一般化していないような気がするので、もう少しその辺の表現があるといいかなと思いました。

○事務局：ありがとうございます。

皆さんに資料を送った後に、ああ、これはまずかったなど、すごく反省したんです。ロジックモデルというのは、本当に自分たちがやろうとしている計画の先にあるものを達成するために、社会に対してどういう影響を与えようとしているのかという部分です。それを先ほどの資料では、要は10年後目標としている社会に対して、事業を進めることによって、その10年後の社会に向かうための道筋というふうに考えています。その道筋に対して、いきなり10年後の最終的な目標に対して到達することは難しいので、その道筋の中で途中経過に当たるような、こういうことができれば、ここが達成できるよね、その前の段階のものを達成するためには、こういうことが必要だねというようなことを順序立てて考えるための道筋というふうに考えています。

アウトプットとかアウトカムという言い方は確かにすごく分かりにくくて、僕も初め、自分で何を言ってるか分からないというような状況に陥っていたんですけども、アウトプットというのは、実際に自分がやろうとすることです。だから、博物館の事業計画に当たる部分です。その計画を実際に実施することによって得ようとする社会の変化、それを社会に影響を与えられた、その影響の部分というのがアウトカムということになるかと思います。もう少し分かりやすい日本語は何かないかなというのをずっと考えていたんですけども、何かありますか。

○事務局（研究部）：用語はいいのがないんですけども、たとえで説明します。

庭がとっても荒れているので、何とか草むしりをしたい。アウトプットというのは、毎日30分、あるいはこの区域の草をむしります、で、むしりましたというのがアウトプ

ットです。その結果、草が減りましたかというのがアウトカムです。

先ほど事務局のほうから言った方向が間違っているんじゃないのというのは、よく今までありがちなのは、観察会を10回やりました、頑張りましたねというのは、アウトプットに対する評価なんですけども、庭の草、減ってないじゃない、それってもともと間違っているんじゃないのかという形で、一緒に考えてくださるとありがたいなところなんです。アウトプットは、私たちが何をしたかということで、お伝えしたとおりです。その結果、思うところに行けたかというのがアウトカムということになります。

研究のところでは、こういう研究を立ち上げて仲間を増やす努力をしましてという報告がアウトプット、本当に仲間が増えましたかというのがアウトカム、さらにその結果、仲間を増やそうと思っていたのは、もっとすごい研究ができるようになったらいいなことだから、もっとすごい研究がそれでできるようになりましたかというのが最終アウトカムという形になります。

○会長：委員がおっしゃっていたのは、そういう言葉を使ってこの場でやるのはいかがなものかという指摘だったと思います。アウトプットというのは、一言で言えば実績、アウトカムというのは、その結果としての社会的な効果、そういうことだと思うんですけども、この会議は評価の専門家の集まりではありませんので、そういうアウトプットとかアウトカム、あるいはロジックモデルという言葉は抜きで進めさせていただきたいと思います。ほかにいかがでしょうか。委員、どうぞ。

○委員 皆さん、こんにちは。

そもそも協議会って何のためにあるのかなって時々考えることがあります。というのも、この評価に関しても、研究の成果とかいろんなことの専門性を評価するのか、来館数、来館者の年齢層など、そういう庶民性というか、ソフト的なものを評価するのか。極論で言えば、誰のための博物館なのかというのをいつも悶々としていまして、この表でも事業目標3ぐらいまでは専門性なのかなって。学芸員さんの研究などをみんなで学びあうと言っているんですけど、後でも聞こうと思っていたんですけど、使えるように整備とありますが、使えるって誰が使うのかなと。それがスムーズに使えているのかなと思います。

事業目標4の「もっと使いやすい博物館へ」って、ちょっと具体性に欠けるといって、ここに盛り込んでほしいのは、私は障害福祉の立場で入っていますので、「障害の有無に関わらず」みたいな文言も入れてほしいと思います。

事業目標5の「より多くの人利用する博物館へ」というところですが、人数的な問題ではなくて、「年齢を問わず」みたいな言葉も入れてほしいと思います。

事業目標6のところは経営の面なのかなと思っていますので、その辺、どこを目標と据えられるのかなというのがあります。

それに関連して、ここは県立の博物館ですので、今、知事が肝入りで打ち出しているMLGs(マザーレイクゴールズ)というのが、環境とかいろんなものを網羅して、琵琶湖を取り巻いてのSDGsの滋賀県版ですが、それともうちょっと絡めて目標を定めてもいいのかなと。10年後というか、まず研究ありきで環境学習をしようではなく、まず環境学習をして、琵琶湖が保全されていなければ生態系の研究もできないよねみたいな、子どもたちにもそういう働きかけの矢印のほうが、県民の皆さんに分かりやすい、来館の皆さんにも分かりやすいのではないかなという2点感じました。

もう一つ、「子どもたちの多くが体験的な琵琶湖学習ができる」というところがあるんですけども、その中には当然、障害がある子どもたちも入っていますよねっていうところも、盛り込んでほしいなと思っています。受け身ではなくて、養護学校だとか、聾学校に、こういう学び方がありますよとか、こんなふうに博物館を利用してくださいということも、もっとアウトリーチに働きかけるということも館としてはしていかなければならないんじゃないかなと思いました。以上です。

○会長：ありがとうございます。事務局のほう、お願いします。

○事務局：ありがとうございます。これは実は、実際にやることに関しては、多分、前回のときにも資料でお配りしています。この事業目標と重点事業に関しては、前回も出ています。

多分、前回の資料とか、これまでにお渡ししている内容が、文章がずっと続いているだけで、分かりにくいものだったんじゃないかなと思います。それで、こういうふうに図化することによって問題点を指摘いただけるようになったのかなというふうに思いますので、そういった文言について、もう少しこうしたほうがいい、こういう部分はちゃんと考えているのかというようなことを、外部評価の部分でもご意見をいただければなというふうに思います。

○会長：中長期計画につきましては、前々回でしたか、お示しいただいて議論をして、そのときにいろいろ意見も出たと思います。一応それでフィックスしたという形になっていますので、計画そのものをもう一度蒸し返してということではなくて、それを具体化した事業について、そんなやり方でいいのかどうかというのをこの評価で指摘していただければという、そういうことだと思います。

○事務局：今、委員から出た話ですが、事業目標の3-3が相当していますけれども、今の流れで言いますと、たくさん子どもたちが体験的な学習、それも効果的な学習がで

きるようになったらいいなというのをまず考えます。委員のおっしゃったのは、例えばそのために、博物館がどんどん行きなさいみたいな話があるんですけども、我々はいろいろ考えて、博物館の人的リソースでできることに限りがあるなと思ったんです。であれば、学校の先生がどんどんできるようにしていくと、子どもたちにもどんどん広がるようになっていこうという方針を取って、なので事業目標のところを、「体験を重視した琵琶湖学習ができる教員の養成」という形にもっていつているんです。この横長の資料です。

そういうような考え方をしているということで、先ほどこれ、左から右に見ていつていましたけども、右から左に見ていつていただくと、また分かりやすくなるかなというふうに思います。ですので、目指しているアウトカム、要するに何ができるようになるかというところを考えたときに、この方法を取りますというのが左側にあるというところですよ。

○会長：では、総論的な説明は今していただきましたので、あと、それぞれの計画と今回の館のほうの内部評価、自己評価がどうだったのかというのを、順を追って説明をしていただきたいと思います。

○事務局：内部評価に関しては、資料4です。事業目標1・2・3・4・5・6、それぞれについて両面になっていますけども、1ページ分、内部評価したものが資料4です。

今後の計画ですが、去年度はこういうような計画でというすごく簡単な文章ですけども、5年間のそれぞれの重点事業に関する計画が資料3に当たります。それらについて、事業目標ごとにご紹介させていただきたいと思います。

まずは、事業目標1ですけども、これは重点事業の1-1、1-2、1-3という3つの重点事業から成っています。

事業目標1としての内部評価の文章については、そちらに書いたとおりですけども、ここでは重点事業ごとにどういうことが行われたかというようなことを紹介させていただきます。

重点事業1-1は、「世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究計画の実施」です。去年度は年報の15ページから20ページにその資料が載っていますけれども、総合研究、共同研究、専門研究、それぞれ件数を進めているところです。琵琶湖博物館の予算だけではできませんので、外部の資金を取ってきたプロジェクトとして、43件の採択を受けているということです。

琵琶湖博物館に関わるいろんな研究者は、総合研究とか共同研究にも、また外部資金のプロジェクトにも、いろんな方に関わっていただいていますけれども、そのほかに博

博物館を使って研究を進めていきたいというような特別研究員の方が19件の受入れを行っています。

5年間の計画については、この事業については総合研究とか外部資金の基盤Bというのは科研費の基盤研究Bのことですけれども、そういった研究について実施していくというようなことです。

次に、1-2の重点事業です。1-2の重点事業は、「研究成果を国内外に発信し、国内外の研究者が参加する研究を推進する」というものですが、研究成果としては、学術論文32件とか、専門分野の著述に関しても同じ32件あります。これも年報の22ページから25ページに資料があります。

この年度の1-2の計画としましては、琵琶湖博物館にどんな研究者がいるかという、リサーチマップという研究者の登録システムがあるんですけども、そこでどんどん情報発信していくということと、既存のウェブを使ったいろんなシステムを使って、どんどん研究成果を発信していきますよというようなことを目指しています。本当は今年度やる予定だったものですが、国のプラットフォームで研究論文をどんどん発信していくことができるJ-STAGEというところがあるんですけども、そこで琵琶湖博物館がこれまで研究報告を出してきました「琵琶湖博物館研究調査報告」という研究の冊子をJ-STAGEで公開することができました。これは本当は今年度やる予定だったものを、ちょっと早めてやっていますので、この重点事業1-2については、5年間の計画をもう一度見直す必要があります。琵琶湖博物館のウェブページで、これを若干整理しまして、「学ぶ」とか「調べる」という項目をつくって、いろんな情報発信をするというようなことをやっております。

最後の重点事業1-3ですが、「研究の質を高める研究環境の整備」ということで、今年度に電子顕微鏡の更新をするために、去年度はこういう予算が要りますよというようなことを交渉してきました。今、壊れている備品がいっぱいありますので、それをどういうふうな更新が必要なのか、修理が必要なのかというリストを出して、更新計画を立てて、今後、予算をどういうふうに獲得していくかというようなことを去年度は進めました。これは計画どおりに進めることができました。

この事業が実際に、事業目標1の「琵琶湖研究を中心とした湖と人間の研究が推進される」というところに、どれぐらい進めたかというようなことを去年度の実施の内容として内部評価を書かせていただいております。事業目標1については以上です。

○会長：ありがとうございます。

事業ごとに区切っていただいたものですが、事業目標1はどちらかといえば、研

究分野のことで、今の説明について、ちょっと言葉の意味が分からないとか、もっと詳しく知りたいとか、質問がありましたら、どうぞお願いします。

ただ、時間の関係もありますので、この場で評価の議論をしだすと、時間が足りませんので、それはまたそれぞれ持ち帰って書いていただくということをお願いしたいと思っています。

私から1つ、気になるところがありまして、事業目標1-2につきましては、資料1の基本計画のところでは、「研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える」というふうに書かれているんですけども、今の説明では、1-2は「研究成果を国内外に発信し」というところまでは一緒なんですけども、「国内外の研究者が参加する研究を推進する」というふうに書かれていまして、最初の目標の文章と違ってきているんですが、これはどういうことなんでしょうか。

○事務局：これは2つの要素から成っています。琵琶湖の魅力を世界に伝えたいというのが最終的な目標です。その第1段階として、今何をするかというと、とにかく琵琶湖ってすごい湖らしいと研究者に分かってもらいたいというところで、前半戦をスタートしています。どういうことかという、「琵琶湖、すごいですよ」と私たちが幾ら言っても、なかなか通用しないんですけども、例えば外国の研究者から「すごいわね」と言われたら、途端にみんな、「すごいわね」って思い始めるみたいなところがあるので、まずは琵琶湖ってすごいらしいというのを外国の研究者に気づいてもらおうかなというところで始めているというところがあります。

○会長：分かりました。つまり、これは5年間の重点事業はこうだということによって書かれているんですね。そこのところがちょっと理解できてなかったものですから。分かりました。委員、どうぞ。

○委員：今の続きのような、違うようなことなんですけども、では、年々この目標の、例えば事業目標1の中の細分化された1-1、1-2、1-3とかの文言は変わっていくということですか。

○事務局：実は先ほどのロジックモデルという表でもありましたけれども、事業目標5から事業目標4のほうに移っているものもあつたりします。結局、目標に向かっていくのに、どう行ったらいいかなというのをやったときに、少しずつ変わっていく要素というのが出てきます。そのときに、今みたいにちゃんと説明しないといけないんですけども、それは前に言っていたことと違うじゃない、道を外れているんじゃないっていうようなところで議論をさせていただきたいなというふうに考えています。

○委員：となると、目標の文言が変わっていると、道をもし外れていたとしても、戻ると

ころはないというか。

○会長：私も、5年間の目標としてはここまでで、最終の目標が変わっていないというふうに今お聞きして、理解をしたんですけども、ちょっと今の話では、目標の文言というのが毎年変わっていくようなものであれば、何のための10年目標なのかということになります。

○事務局：大きなところは変わらないんです。

○会長：というか、そこどころが、何かなし崩し的に変わっていくという……。

○事務局：すみません、説明があまりよくなかったかもしれませんが、事業目標1という項目の中で、目指すべき内容は同じです。5年間の計画の中で、1-2に関するご質問だったかと思うんですけども、発信して行って、仲間を増やしていきたいということですね。参加する研究を推進させるためには、まず発信して、琵琶湖の研究ってすごく面白いよというところを5年間かけてやる。その後に、面白いと思ってもらった人をどんどん寄せて行って、一緒に研究を進めていくというような過程を考えています。ですから、重点事業とか事業目標の目標自体は変わらないです。計画自体は10年間の計画を考えていますので、5年ぐらいの年限では、どんどん発信して行って、面白いと思ってもらう人を増やしていく。その間でも共同研究とかで、国内外の研究者を集めてくるということは同時に進めていきますので、どっちを重点にさせるかという、5年間は発信していくというほうに重点を置いて、その後は多くの研究者の参加を募るような努力を進めていくというような方向性です。

○会長：いや、それはいいんですけども、例えば資料1に出てくる文言が、資料2では変わってしまっているというのはまずいんじゃないかということです。

○事務局：それは多分、私のミスです。

○会長：というか、ほかのところでも全部変わっているんですね。「琵琶湖の魅力の人々に伝える」というのが消えてしまっているんで、これはまずいんじゃないかと思えます。

○事務局：それは大変失礼しました。

○会長：1-1にしましても、資料1では、「琵琶湖の価値を高める研究の推進」となっているんですけども、資料2では、「琵琶湖の価値を高める研究計画の実施」というふうに文言が変わっています。

○委員：事業目標の表記が、資料2の図と違うんです。

○事務局：ああ、本当ですね。すみません。資料を作り直します。基本計画に書かれている文言を中心に書いていたつもりだったんですけども、どこかで間違えたようです。

- 委員：これはこれで昨年の3月に出したけど、もう一回文言を含めて修正しますと言っただけならば、スムーズにいく話だったんですけど、そこの説明がちょっと足りないまま進んでいるなど思ったんです。これはこれでかなり大事なものだと思うんです。これをちゃんと、どこに、どう位置づけるのか。そして今回の具体的に出していただいたものとの整合性、そこの説明があれば、多分すんなりいく話だと思います。
- 事務局：すみません、もう一度ちゃんと見直して、作り直したいと思います。
- 会長：ちょっとした文言の違いだったらいいんですが、特に1-2の場合は、「琵琶湖の魅力に人々に伝える」という部分が消えてしまっているの、そこところは随分内容が違ってくると思うんです。今、例えばブックレットなんかでいろいろ成果を発信されていますけども、そういうことが抜けてしまって、研究者の間での共有だけになってしまっているというふうな気がしますので、そこはかなり大きな問題だと思います。
- 事務局：すみません、もう一度確認して、作り直したいと思います。失礼しました。
- 会長：ほかにいかがですか。じゃ、続いて、事業目標2のほうをお願いします。
- 事務局：では、引き続き進めさせていただきます。
- 委員：もう一回立ち位置を。どこまで、どれに基づいていくのか。この補足の、もう一回立ち位置を改めて示していただきたいと思います。
- 事務局：基本計画が一番の基本ですので、それに基づいて行います。ただ、その内容です。基本計画に基づいてやりますので、よろしくをお願いします。
- 会長：基本計画はいじらないということですね。
- 事務局：はい。では、引き続き事業目標2の説明をさせていただきます。

「資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備」です。ひょっとしたら、また文言が間違っているかもしれませんが、基本計画が基本になりますので、よろしくをお願いします。

事業目標2も重点事業が2-1、2-2、2-3の3つから成り立っています。

2-1は、「標本・資料の管理体制の強化」ということです。どのように管理するかというので、収蔵空間の不具合の原因を把握して、今後のことを計画するというようなことが、この重点事業に当たります。去年度は過去の事故歴とか、照明の故障についての取りまとめ、修理箇所の取りまとめを行い、その優先順位を検討しました。水漏れがあった収蔵庫について、その原因の特定と修理を実施いたしました。

次、重点事業2-2です。「標本・資料の整理の推進と公開によるデータベースの充実と利用促進」です。未整備資料の整理・登録を通常どおり進めました。年報の資料は4ページから7ページにその資料があります。データベースは多くの標本の分野で今、

資料整理・管理に使っているデータベースがありますけども、それらのうち、まだデータベースができていなかった考古資料に関して、データベースを作成しているところです。去年度の事業は以上です。

2-3です。「ICT利用による博物館資料について画像を中心とした資料情報の公開」ということで、画像データベースの一部を今まで公開できてなかったものを公開することができました。登録されている資料、今のデータベースはほとんどが文字ベースですので、写真、画像を中心に公開することによって、どういう資料があるかというのを分かりやすくするというようなことを去年度は推進していきました。

これらのことについて進めていったんですけど、今後の課題については、補修が必要な箇所の調査を行いました、そのための予算の獲得と実際に修理を実施していくというようなことが今後の課題になっております。未整備資料もまだまだたくさんありますので、それをちゃんと登録して、公開していくということを着実にやっていくということが重要であるというふうに考えております。

事業目標2については以上です。

○会長：資料関係についての部分ですが、今のご説明でいかがでしょうか。委員、お願いします。

○委員：一番最後に音声ガイドの充実ということで、新たな音声ガイドシステム「ポケット学芸員」が導入できたと、ここに書かれておりますけれども、利用者の反応であるとか、そういった利用者の声というものを博物館側は聞かれたことはありますか。来館者アンケート調査を定期的に今まで実施されてきましたが、このことに関しては利用者の反応はいかがでしょう。

○事務局：アンケート調査に関しては、アンケートでその反応は特にはないですね。そのほか、何かありましたか。資料か展示か。

○事務局（展示係）：ちょっと現状について説明いたします。

琵琶湖博物館の展示ガイドシステムについては、「びわ博ナビ」というものと、「ポケット学芸員」という、今、二本立てですておまして、ちょっと使い方等が違うことから、昨年度はその使い方をきっちりと来館者の方に周知するというところをやって、まだ利用者の使用に関する評価については、具体的にはできていないところなので、今年度、ちょっと繁忙期は厳しいのですけれども、閑散期には何かできるかどうかを試みたいと思っております。

○委員：ありがとうございます。

○会長：よろしいですか。ほかにいかがでしょうか。

これは私の感想なんですけど、内部評価ということなんですけども、内部評価ということ、計画があつて、実績が出てきて、その実績を計画と照らし合わせて、どこまで進んだかということ自ら評価する、そういうものだと思うんですけども、この文章を読んでいますと、こういうことをやりました、やりました、やりましたと。悪く言えば、実績の羅列になっているんですね。それを自己評価としてどういうふうに見詰めているかというところが文章として全然出てきてないんですけども、これを内部評価として、我々に外部評価をしろと言われても、ちょっとしんどいんじゃないかというのが私の感想です。ほかの委員の方、いかがですか。

○委員：同感です。

○会長：ありがとうございます。そこら辺、館のほうはどういうふうに……。

○委員：今、お返事がなかったのですが、しゃべるだけなんですけど、行って自分たちが便利になったとか、そういうことが評価ですよ。例えば、事故歴、照明の故障など取りまとめることができたので、どうだった。私たちにはよかったとか、だけど何が足りなかったとか、簡単な今の感想でしかないんですけど、そういうことが書いていたら、それに対して外部評価ということになるので、まず自己評価があつて、それを外部評価する。外部評価の考え方としては、それで大丈夫ですか。

自己評価を外部評価するのか、自己評価のそもそもの内容を同じように外部評価するのか、どちらですか。

○会長：自己評価に対して、外部評価です。

○委員：となると、やっぱり自己評価の、今、私が言ったのは単なる感想ですけど、そこを内部で、だけどまだ足りなかったとか、それを評価されていると、今、皆さんがおっしゃったことも分かりやすくなるのかなと思います。

○事務局：ありがとうございます。私が答えるのが適切かどうか分かりませんが、館長からも、きちんとした内部評価をしないと外部評価ができない。だから、きちんとした内部評価をすることによって、きちんとした外部評価を得られるという意見をいただいています。実際、私もこれをまとめながら、この内部評価では評価になっていないんじゃないかというふうに感じてはいます。だったら、そんなの出すなよというふうにお叱りを受けるかとは思いますが、そういったことも含めて、これでは評価できないというようなことも、外部評価として書いていただければというふうに思います。

○会長：じゃ、ひとまずこの話はちょっと置いておきまして、事業目標3のほうに移っていただきたいと思います。

○事務局：では、次の事業目標3について説明させていただきます。

「みんなで学びあう博物館へ」ということで、事業目標3についても、重点事業1・2・3という3つの区分から構成されております。

3-1は、「多くの人に関わる多様な交流事業を実施する」ということで、どういうことをするかというのは、5年計画の中では、今、交流事業がどういうふうに行われているか、どういうような傾向があるのかというようなことを集計をいたしました。そして、その現状把握をいたしました。

3-2については、「博物館利用・参加方法の制度的幅を広げる」ということで、他館の事例の登録制度について情報収集をいたしました。

3-3は、「体験を重視した琵琶湖学習ができる教員の養成」ということで、これは先ほどの全体の構成のところから芳賀から説明があったことですが、琵琶湖学習ができる教員を養成していくということで、去年度は博物館利用をしている学校教員にアンケート調査を行って、今後の支援にどういったものが必要なかというような検討を始めたところです。

この事業目標3は先ほどの事業目標2と同様に、資料があまりありませんけれども、重点事業はそれぞれ今後の検討のために情報収集をしたりとか、検討を始めるというようなところで収まっているんですけども、今後はそういった資料を使った具体的な事業展開とその可能性について実施していく必要があるというふうに考えております。

事業目標3については以上です。

○会長：ありがとうございます。どうぞご質問ありましたら。

特に新しいところでは、企業向けのはしかけみたいなものをつくろうとされているところですかね。委員、どうぞ。

○委員：今回の内部評価の話ではないんですけども、10年後のアウトプットのところで、実施ができる教員がいるというふうには書かれていて、これ、計画段階のところでさかのぼってしまうかもしれないんですけど、5年ぐらい、湖の子サポーターをしていたことがあって、先生たちが「うみのこ」の先生とかされているんですけども、教員の方だけでは足りないの、湖の子サポーターが船に乗せたり、プランクトンの実験をしたりとか、補助をしていたんですね。なので、先生が足りないところにますます教員の方に学習をもう一つお願いして、授業の合間に出てくるのも大変なのに、自分たちの教えることをプラスしてしまうと大変になるのは、皆さん、分かっておられると思うんですけど、はしかけの方たちがいらっしゃるので、はしかけの人が教員に近づくみたいな、里山保育じゃないですけど、幼稚園の保育士さんたちが里山保育をするのではなく、里山保育の人がいて、その人が幼稚園に入っていきみたいな逆パターンがあるように、はし

かけの知識を持った方が育って、そこを教育して、学校に入って、教員の方と協働するみたいなことだと、教員の方の負担が少し少ないのかなと思って、ちょっと目標が変わっちゃうんですけど、改めて見ておりました。

○事務局：ありがとうございます。

○会長：館のほう、よろしいですか。

○事務局：はい。

○会長：委員、どうぞ。

○委員：3-3で、「博物館利用をする学校教員にアンケート調査を行い、今後の支援についての検討を始めた」というくだりがあるんですけども、私たちは、そのアンケート調査の結果を見て評価をすることになるんですかね。アンケートでどういう項目をアンケートしているかもすごく左右するというか、当然、利用ができていない教員の方がアンケートに答えていますし、アンケートってすごく難しいと思うんですね。聞き方によっては、イエスが多くなったり、ノーが多くなったり、項目とかも評価の対象になるのではないかなと。こういう項目を入れないと、意味がないんじゃないかとか、そういうのも出てくるのかなと。それで利用する教員だけというのもちょっと引っかけますし、体験学習が目的になってしまうということは、ちょっと危惧するところで、最終的に体験学習のその日が目的ではなくて、その向こうにある環境学習とかが目的にしてほしいと思うんですが、アンケートも問い方によっては、「今日の体験学習はいかがでしたか」みたいな問いかけだったら、「よかった」みたいな答えになっちゃうでしょうし、「環境学習にどうつながったか」というような問いもなかったら、今度、どんなふうに事業を進めるかということの矛先も、毎年同じアンケートをして、同じ評価が返ってくるのではないかなと思いますので、その辺もお願いしたいと思います。

○事務局：資料は何か出せますか。今じゃなくていいですけど。

○事務局（交流係）：すみません、コメントいただきまして、どうもありがとうございます。委員の方がおっしゃったように、交流係の中で、学校教員を相手にした交流学習プログラムみたいなものなんですけれども、アンケート調査の項目については交流系のほうで今後検討していきたいと思っております。

それと、今までの教員を対象にした交流事業の中では、アンケートから分かっているのが、教員の方々が博物館に来て研修を受けまして、体験プログラムと見学体験も含めて、研修の時点で分かってくるんですけども、その後でどういうふうにつながっていくか、あるいは自分たちでやろうとするときに、どのようなことができるかというのが課題として分かってきていまして、それも含めて今後も交流係の中で検討していきたいと

思っております。ありがとうございます。

○会長：委員、どうぞ。

○委員：学校から来る子どもたちですけれども、子どもたちがこの博物館をどんなふうにご利用しているかということですが、私の知る限りでは、滋賀県の場合、3年生は、「今と昔のくらし」ということで、C展示室の富江家を利用されているかと思います。あと時間が許す限り、A展示室とかB展示室とか水族に回っているという感じに受け止めています。

肝心の5年生はフローティングスクールに行きまして、今、コロナ禍において宿泊はできなくて、船の中から琵琶湖を見る。それもすごく大事なことだと思うんですけども、せっかくリニューアルしたわけですから、C展示室もA展示室もB展示室もすばらしい展示になっておりますので、これは一つの提案ですが、学校にも働きかけてほしいのは、5年生は琵琶湖学習に取り組みます。その琵琶湖学習を進めるに当たって、この博物館を5年生が大いに利用してほしいというのが私の願いなんです。恐らく5年生はフローティングで船の中だけで完結してしまっているの、かつてはフローティングの船に乗った子どもたちが琵琶湖博物館に来ていたと思うんです。そういうこともあっていいんじゃないかなと。琵琶湖のことを子どもたちに伝えたいというのであれば、琵琶湖学習というものをもう少し再構築していただけたらと思っております。

○会長：ご提案ありがとうございます。

事業目標3について、特になければ、事業目標4、展示の関係をお願いしたいと思います。

○事務局：では、事業目標4に進みたいと思います。

「もっと使いやすい博物館へ」ということで、この事業目標については、1・2・3・4の4つの重点事業から成ります。

4-1については、「誰もが楽しみ学べる展示手法とガイド機能の強化」ということで、去年度はポケット学芸員の内容充実により、読み上げソフトとの併用で音声ガイドの箇所を増やしました。多言語化については今後の検討項目になっております。

4-2については、「『観る』展示から『観る+使う』展示への成長」ということで、インターネットページを使って、「おうちミュージアム」コンテンツを作成いたしました。あとは展示室にあるパネルの基礎になった論文のPDFに接続できるようなQRコードを展示室に設置いたしました。設置箇所に関しては、今後さらに検討していった、増やしていくというようなことを考えております。

4-3です。「社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長」ということで、最新

情報を踏まえた展示更新ということ、それぞれの展示室で行いました。年報には31ページから37ページにその内容が詳しく書かれております。A展示室、B展示室、C展示室、Dはディスカバリールーム、Eはおとなのディスカバリーです。それぞれ更新をいたしました。

企画展示、これは毎年ですけれども、今年度は今週の土曜日から始まります。チョウの展示です。ギャラリー展示、トピック展示等行いました。

次、4-4です。「ICTを利用した琵琶湖の魅力とその入口としての博物館の紹介」ということで、去年度は来館者用サイトと研究学習用のサイトを統合して、もっとページを使いやすいような、アクセスしやすいような形で改編いたしました。ユーチューブチャンネル「びわこのちからチャンネル」を創設しまして、展示の概要であるとか、展示室の360度動画であるとか、フィールドへの誘いとして、研究紹介動画の4本をアップしました。それについては今年度も幾つかアップする予定になっております。

事業目標4の今後の課題としましては、最新情報への更新計画とその実施、ICTを使った情報発信のコンテンツ作成計画について検討、計画をさらに進めていく必要があるというふうに考えております。

事業目標4は以上です。

○会長：ありがとうございます。

リニューアルした後、どういうふうにこの展示を活用していくかという、そういう問題を積極的にやられていると思います。

特にご質問がなければ、続いて事業目標5のほうに進みたいと思います。

○委員：先ほど立ち位置の話をしたんですが、こっちの基本計画には4-4はない状況ですが、ただしICTのところというのは非常に重要なところだと思うので、もう一回その辺の整理をしていただきたいと思います。こちらの第三次中長期計画の中には4-4という表現はないんですが、でも内容としては大事だと思いますので、先ほど2の上のほうで取り上げていただきましたけれども、そこに盛り込んでいくのか、もうちょっとそこいらの整理を今後しっかりしてもらいたいと思います。

○事務局：すみません、ありがとうございます。発言よろしいでしょうか。

○会長：どうぞ。

○事務局：この4-4については、基本計画の中では5に入っていた内容です。内容的には目指すべき方向性ということで考えると、事業目標4に入れるのが適当じゃないかというふうに考えましたので、4の項目に変えさせていただきました。ここの説明をするのが抜けておりました。申し訳ありません。内容的には基本計画の中で、以前は事業目

標5の中に入れさせていただいていた項目です。

- 会長：事業計画5-1ですか。
- 事務局：はい、そうです。
- 会長：これ、移すということは、どういう扱いなんですか。基本計画のバージョンが変わるということですか。
- 事務局：そうです。
- 事務局（事業部）：すみません、基本計画のところは、その当時に10年後を目指してやっていたということでもとめた内容になっています。それが今度、行動計画的にきちんと10年間でどのように進めるかという計画を立てていく中で、今回、もう一度事業の整理をしながら、分かりやすい表にまとめさせていただいて、そのときにやっぱり全体を見ながら、10年間の中で前半5年間は、先ほどあった1-2で言うと、魅力を発信するというのは後半の5年間に回して、前半は先に研究を進めましょうというような形を考えたので、今回、この重点目標の文言が変わってきている。ただし、事業目標は変わらず、重点事業は、表現が行動計画、その10年間のうち、どういうふうにやっていくかということを考えて中で文言が変わってきている、内容が組み替えられているという、内部で議論をした結果、今、里口のほうの説明している、内部評価もそれに沿った形でまとめさせていただきました。
- 会長：事情は大変よく分かりましたけども、形式的なことをすっきりさせてほしいということをお願いしているんですけどね。変えてしまうんだったら、もうバージョンを変えてしまえばいいので、だけどバージョンを変えないんだったら、不具合は感じながらも、元のまままで進めていかないと、受け止める側が混乱すると思うんですね。そこのところ、どちらかはっきりさせていただきたいと思います。
- 事務局：何かありますか。
- 館長：すみません、いろいろ言っていますけど、最初の中長期基本計画ですが、これはやはりこのままでいきたいと思っているんですけども、実際今、一生懸命、私たち、どうやったら本当にそれが実現できるのかということを考えている過程で、いろいろ混乱しているんだと思うんですね。したがって、もう一回整理させていただきたいというのが今の気持ちでございます。
- 会長：分かりました。じゃ、整理のほうよろしくをお願いします。
- では、事業目標5のほうをお願いします。
- 事務局：では、事業目標5を説明させていただきます。
- 事業目標5は、「より多くの人々が利用する博物館へ」ということで、5-1、以前は

5の1・2・3でしたけども、以前の5-1は事業目標4-4という形で入れさせていただきましたので、現在のところ、事業目標5は、5-1と5-2の2つの項目から成り立っております。

5-1は、「双方向の広報や各種調査による評価方法の確立と事業への反映」ということで、来館者アンケートなど継続的に実施しているものがあります。それでリピーター等新しく来られている来館者の方々がどういった方々であるかというようなことを把握しました。年報では、95ページから99ページにその内容が詳しく載っております。

5-2は、「来館しやすい環境の整備」ということで、最近の社会では——最近でもないですけども——キャッシュレスで入れるというようなシステムを必要としましたので、去年度についてはキャッシュレス、チケットレスシステムの導入をすることで、キャッシュレス化を進めました。こんなカードが使えるというふうに、入り口では表示されております。チケットレスに関しても、ネットページで事前に購入することができるようになっております。

現在、新型コロナウイルス感染症対策で、予約システムを導入しておりますけれども、将来的には予約システムというのはなくしていく方向で、誰もが簡単に博物館にアクセスできるようにしていきたいというふうに考えております。

事業目標5の今後については、アンケート調査をしながら、各事業についても、いただいたいろんな意見をフィードバックさせていって、よりよい事業の確立ということに努めていきたいというふうに考えております。以上です。

○会長：ありがとうございます。ご質問ありませんでしょうか。どうぞ。

○委員：何回もすみません。全く角度の違う質問で、入場料のことで、ちょっと私の周りでも賛否あるんです。要は、1日当たりが800円と、年間パスが1,600円でしたっけ、その差のなさ具合が、それは入りやすいわと言う人と、それはちょっと価値をやっぱり下げているのと違うという、いろんな意見を私も聞いているので、今さらいじってほしいとも思っていないんですけども、その辺は内部ではどういうご議論をされてきたのかなというのは、ちょっと気になっています。全く違う質問ですが、お聞きします。

○会長：この機会にということで、簡単をお願いします。

○事務局：年間パスについては、大分議論がありました。大分前にあれは変えたんですけども、前は4回でした。4回で元が取れますよと。博物館を見回しますと、なぜかみんな4回なんです。本当に4回も来るのかなあと考えたんですけども、実は水族館が2回なんです。水族館のほうは3回目以降は、もう来てくれるだけでいいです、そういうビジネスモデルがあるんですけども、私たちも例えば年2回有料で来ていただいても、

3回目以降は本当にヘビーユーザーで、どんどん来てもらえるんだというふうに考えていますので、そう考えると2回でいいのかなという感じで、2回にさせていただいたということになります。ですから、年パスは何のためにあるのかというと、とにかく通ってくださいという呼び水というふうに考えております。どんどん来ていただくことで、どんどん使っていただく。それを目指してこの値段設定になっております。

○会長：よろしいでしょうか。

○委員：はい。

○会長：ほかにいかがでしょうか。どうぞ。

○委員：2点あるんですけども、当然、現代社会において、ICTの利用がどんどん進んでいって、チケットレスとか、ディズニーランドとかは、もうそうなってきたので、分かるんですけども、予約にしてもチケットのことにしても、情報を取るときも、利用できない人もたくさんいらっしゃるということを考えていただいて、そういう発信のほうも重点に入れてほしいなと思っていました。今回はコロナのことで予約システムになったので、来てもゆっくり見られるといういい面はすごくあったかなと思うんですね。けども、その予約システムがあるがために、スマホとか使えない。今まで足しげく通ってくださっていた年配の方とかが来れなかったのかなと思ったりとか、事務局にもご相談しましたが、視覚障害の方々がアクセスしにくいシステムだったので、その辺がどうだったかなとか、とても気になる場所だったので、アナログの部分も残しておいてほしいなという思いがあります。

それと、またアンケートのことにこだわるんですけども、アンケート項目にやっぱり今後の改善に役立てたいという思いがあるのなら、年齢というの、以前は年配の方がたくさん来てくださっていたのに、物すごく減ったということが何が原因なのかとか、それとか赤ちゃんを連れてくるお母さんがすごく少ないとか、そのためには授乳室をもうちょっときれいにしたほうがいいんじゃないとか、そういうような観点も必要かなと思うので、お越しになった皆さんの年齢というのも書いていただくようなことも必要だし、障害の有無も、せっかくUDの委員会までつくって、UDに配慮したことをずっとやってきたんですけども、それが数字としては出てきにくいということがあるので、前と比較してほしいので、こういう方がすごく増えたねとか、こういう方々が来にくい。じゃ、どういうふうにしたら来てもらえるだろうかみたいなアプローチも含めて、今後改善していくというような、何かそういうのを私たちが見て、ここってちょっとへこんでるよねみたいなことを評価できるような、数値化というか、アンケートを可視化してもらって観点をもう少し増やしてほしいなと思います。以上です。

○会長：ありがとうございます。

○委員：すみません、ちょっと教えてください。

中間的な目標が湖と人間を考える人びとの活動というふうになっていて、そしてアウトカムのところの目標の文言も活動が行いやすくなると。中長期的には、利用されている人々の活動というものが、この博物館というフィールドの中で行きやすくなる、あるいは充実していくというところを狙っておられるのかなというふうに解釈をしているんですが、その中で今回の評価の目標の中にも、活動が行いやすくなると。ところが、利用する博物館、多くの人利用すると。「活動」と「利用」、その辺りの解釈がもし違うのであれば、少し教えていただきたいというふうに思いますのと、道義的に解釈をするということであれば、またその辺り教えていただきたいのと、将来的に博物館というフィールドが起点になって、「湖と人間を考える人びとの活動が持続的に行える」というところに向かっていくには、例えばこの年報の98ページにある、より滞在時間を増やすとか、回数も大事だと思うんですけども、その辺の目標の設定も必要になってくるのかなというふうにも思います。また、そちらについては今後、より具体的に、どのような指標をもってこれを評価していくのかというところは検討いただければいいと思うんですけども、最初に申しました「活動」と「利用」、その辺りの解釈についてお願いをいたします。

○会長：言葉の使い分けについてお願いします。

○事務局：これについては、博物館を利用される方、例えば展示だけを見たいという方がおられますし、必ずしも博物館を使った活動をしたいという方ばかりではないというふうに考えています。そういった方々が博物館を使わないで活動するために、博物館を利用するというようなこともあると思います。その利用というのは、例えば図書の利用であったり、資料の利用であったりというようなことも含めています。ですから、活動するというのは、琵琶湖博物館を使って調査をしたりとか、何かを調べたりとか、環境学習をほかの人たちに広めるような活動であったりとか、そういう活動というふうにイメージをしていますし、利用については、そういった活動も含めていろんな博物館の利用の仕方というようなことを、もっと利用しやすいような形で進めていきたいというふうに考えています。「利用」と「活動」の使い分けについては、そういうふうに考えております。

○会長：いかがでしょうか。

○委員：ありがとうございます。

○会長：ほかにいかがですか。お願いします。

○委員：先ほどの重点事業の5なんですけども、5-1が4-2ということで、移動するというふうなことで、今、重点事業の5のことについて説明とかを聞かせていただいているんですけども、5-2なんですけど、「来館しやすい環境の整備」というふうなことで、今見てみると、2022、今年度ですが、キャッシュレス・チケットレス導入による利便性の向上と。これはすみません、今の評価のこととは全然違うんですけども、その後のことは特に何も書かれていないと。もともと5のところには、1・2・3というふうなあって、5-1が4-4になりましたと。それで5-1、5-2というふうな感じであるんですけども、今年度が終わったら、この5-2というのはいなくなってしまうのかというふうなことをふっと思ったんです。

そうすると、いわゆる事業目標というのが6つあって、それぞれの事業目標に対して3つとか、4つとかというふうなところでずっと進んでいるのが、5だけはそのうち1つになってしまうのかなあというふうなことを思うと、いろんな理由があって5-1にあったのが、4-4に移動されたというふうなことなのですけども、そこら辺りというのは、要は事業によってそれが3つあるとか、ここは1つですよというふうなことでも構わないのかというふうなところ、その辺りをちょっと教えていただけると助かります。よろしくをお願いします。

○会長：物足りないなら、物足りないということを評価で書いていただければいいんですけども、事情があれば、説明のほうを館のほうからお願いします。

○事務局：総務課です。

コロナになりましてから、どんどんキャッシュレス・チケットレス等が感染防止も含めて導入できているという意味では、利便性の向上というのは一定上がっていると思います。昔ながらの現金の関係で入っていただく環境もそのまま残しておりますので、多様な入り方ができるような状態にはなっているかと思えます。

○事務局（企画調整課）：おっしゃるとおりだと思います。4のもともと5-1にあったものを4-4に入れたというのは、それは4の項目を進めるために、この項目は必要だからということなんですけども、確かに、今の計画どおりにいってしまうと、5の項目というのは5-1だけでやるということになってしまいますので、多分これでは駄目だろうというふうに考えています。前年度の計画としては、この5-2というのはキャッシュレスをやって、大体それで終わりじゃないというような項目になっていたんですけども、私、これをまとめるときに、いや、それだけでは来館しやすい環境の整備には全くならないというふうに考えています。ですから、これは琵琶湖博物館の宿題というか、5年間の計画自体をもう一度考え直す必要があるというふうに考えています。そ

これは私の考えですので、皆さん、よろしくお願いします。

○会長：ここら辺は皆さんも外部評価のほうでいろいろと書いていただければというふうに思います。それでは、最後、事業目標6のほうについての説明をお願いします。

○事務局：最後の事業目標6です。

事業目標6は、「博物館の活動を安定して継続する」というような内容です。事業目標6も、6-1、6-2の2つの項目から成り立っております。

6-1は、「老朽化した施設の改善と現状での施設に合わせた災害への備え」ということで、点検や修繕等を行いました。その必要箇所のリストアップを行いましたけれども、優先順位というのはまだつけられていませんので、その点については今後やらなければならないことだというふうに認識しております。危機管理については、これまで作成している既存のマニュアルをまとめて、どういうときにどういうふうな対応が必要なのかというようなことを整理いたしました。

6-2については、「安定した活動基盤を確保する仕組みづくり」ということで、リニューアル後の支援の受入れ制度について試行を行っておりますが、コロナ禍の関係上、いろんなところに出歩くことがまだ難しいという点もありますので、まだあまり進んでいないというような現状があります。

事業目標6については、今後、施設の修繕等具体的な調査、どれぐらいお金がかかって、どういうところをやらないといけないのかというようなことと、優先順位を今後つけていくというような検討が必要であるというふうに認識しております。あと、社会状況を見ながら、支援の受入れ制度などについて、新たな整備を行っていきたいというふうに考えております。事業目標6は以上です。

○会長：ありがとうございます。いかがでしょうか。どうぞ。

○委員：事業の6ということではなくて、全体的なことなんですけれども、確認ですが、私たちがする「外部評価基準票」には、令和3年度の内部評価についてのことを書けばいいということで間違いないですね。今回は初回ということで、5年計画のところでみんなちょっと戸惑ってしまった部分があると思うんですけれども、私たちがするに当たって、先ほどから議論がありましたとおり、この5年間の事業計画の各項目に、この5年間で達成する状態、目標と進めることを表にさせていただいているのが、私はすごく分かりやすかったんですけれども、例えば2021年度の目標、何々をこうする、進めること。そしてこの右側に枠を作ってください、今ここの内部評価していただいた項目が、進めることに対してできたかどうかというふうに一覧にさせていただけると、すごく分かりやすいなと思いました。

私あまり慣れてないんですけども、すごく資料がいっぱいあって、文字が並んでいて、研究論文を読むかのように、皆さん、慣れていらっしゃるかもしれないんですけども、ちょっと大変です。経営者ではないので、博物館のこの17項目を全部把握しながらするのがすごく難しいので、例えば数値目標とかはこれからということなので、しょうがないんですけども、今説明していただいたのはすごくよかったので、目標を進めることの横に、丸、三角、バツみたいな簡単な記号があると、この進めることに対して、内部評価としてできたこと、できなかったこと、課題みたいなことが箇条書きにしてあるといいなど。このパワーポイントの資料もすごく分かりやすかったので、何か全体的にまず捉えて、細かいところをどうかなと思ったときに、この詳しい資料を見ていくという作業が、外部評価する私たちにとってはやりやすいのかなというふうに聞きながら思いました。資料をもう一回作成していただけるということですので、ご参考までにとお話ししてお話させていただきました。

○会長：次の話に入ってしまうので、ひとまず事業目標6までの説明、質疑ということで区切りたいと思うんですけども、オンラインで参加の龍見委員、すみません、共有画面ばかりできましたけれども、何かご意見なりご質問がありましたら、お願いします。

○委員：事業目標6に関してなんですけど、危機管理で既に目標が設定されている中で、新たな視点を私が言っちゃうことになるんですけども、本来の対策は6-1で述べられていると思うんですけど、今、ITとか、インターネット災害に対しての備えも必要だと思うんですね。尼崎のUSBが紛失した事件であったり、最近のAUのシステム障害とかもありましたし、そういう災害に対しての備えとかに対する目標とあって、今後その目標に加えられたりしますか。

○会長：ありがとうございます。事業目標6ですね。

○事務局：そうです。事業目標6です。

危機管理の既存のマニュアルを集めているところで、その中には博物館だけではなくて、県庁共通のものも含まれていて、今のIT関係のものについては、今のところ、県庁の情報を危機管理のものをベースに、うちにアレンジしていこうと思っています。ご指摘いただいたところをちょうどやろうとしているところです。ありがとうございます。

○会長：ほかによろしいですか。それでは、どうぞ。

○委員：全体的外れかも分からないんですけども、内部評価に対する評価ということとをさっきからおっしゃっていたんですけども、中長期基本計画に対する評価はやってはいけないのでしょうか。

○事務局：それも含めてご意見をお願いします。

○会長：じゃ、次の話に入らせていただきます。

これからの評価のやり方について、これから決めていきたいと思うんですけども、もちろん事務局、博物館側としてシナリオはお持ちなんですけども、そのご説明をしていただく前に、今までの話を踏まえて、ちょっと私のほうから提案があるんですけども、前回は話がありましたけども、この記入票は、6項目について持ち帰って、今日の話も踏まえて書いていただいて提出していただいて、それを私だけでは足りないので、多分、副会長も入っていただいて取りまとめて、評価委員会としての外部評価とするという、そういう道筋を提案していただいています。

ただ、先ほどの話にもありましたけども、今回の資料4の内部評価に対してというふうに言われると、ちょっと皆さん、評価しづらい部分があるということが明らかになってきていますので、この内部評価、資料4のほうをもう一度館のほうで、今日の議論を踏まえて、ちゃんと自己評価という形のものに作り直していただいております。それを私たち委員のほうでもう一度見せていただいて、それに対して評価をさせていただくというふうな流れでどうかなというふうに思っているところです。

それでは、事務局のほうから、今後の進め方についてご説明をお願いします。

○事務局：予定していたのは、皆様から外部評価をしていただいて、この「外部評価記入票」を、今、紙でお送りしていますけれども、後ほどまたファイルでお送りさせていただきますので、それに記入いただいて、最終、事務局に出していただいているんですけども、それを会長にまとめていただいて、外部評価のまとめというような形で出しているかどうか考えていました。

ただ、今、ご提案のように、今の内部評価では外部評価できないということですので、今日いただいた意見を持ち帰って、もう一度内部評価を書き直したいというふうに思います。それを皆様にお示しして、最終的には会長にまとめていただきたいというふうに考えておるんですけども、どうでしょうか。

○会長：その際に、今、委員からいただいたようなご意見も参考にさせていただいて作っていただくということと、それから中坊委員がおっしゃっていますように、出てきた内部評価だけに対する評価だけじゃなくて、事業計画そのものに対する評価をしてはいけないのかということについても、当然これはしていただくべきことになりますね。

○事務局：もちろん。我々はこういう計画で考えているというようなことに対して、その計画は甘いとかというようなことも、実際に意見をいただければというふうに思っております。

- 会長：今回、最初の1年に対する、令和3年度のこの内部評価に対する我々の意見という事なので、まだ1年目なんですよね。ですから、うまくいってるとか、そういう評価はなかなかしづらいと思うんです。だから、そこまでは必要なくて、私の感じでは、1年目のちゃんとしたスタートラインに立てているかというところ辺を見ていただければいいんじゃないかというふうに思いますが、委員の皆さんから評価の進め方についてご意見がほかにありましたら、どうぞ。
- 委員：6事業全て15人が全部評価するのか、以前お聞きしたのが、自分が専門で関わっている事業、私はこの1つだとか、2つだというのでいいのか、どちらでしたでしょうか。
- 事務局：基本的には全部に対してなんですけれども、自分がどういう立場でそれを評価するのかというようなことも書いていただいて、評価をいただきたいと思うんですけども、もちろんこの分野はよく分からないというようなこともあるかと思しますので、そういう分野に関しては白紙にさせていただくということでも構わないかなというふうに思います。
- 会長：決して義務感にかられて、埋めないといけないということで無理される必要はなくて、書く気になったところだけ書いてもらったらいというぐらいでいいんじゃないかと私は思います。
- 委員：ありがとうございます。あと、資料なんですけれども、今後もみんなの分、紙媒体でずっと郵送してくださるような感じなんですか。今ちょっと、データ化ということも全体的になっているので、ご希望される方には郵送するけれども、データでお送りするというご検討いただけますでしょうか。
- 事務局：はい。どちらかという、そのほうが我々としてはありがたいんですけども、どちらのほうがよろしいでしょうか。
- 委員：できたらこの評価票自体をワードか何か、書き込める形で送っていただいて、それをまたメールで返信するというのがやりやすいと思うので、できたらそういう形がありがたいなと思います。
- 事務局：はい。評価票に関しては、もちろんこの後、メールでお送りさせていただきたいと思うんですけども、その他資料に関しても、メール等でお送りしたほうがよろしいでしょうか。もしそのほうがよろしければ、資料もまたメール等でお送りさせていただきたいと思います。
- 委員：できたら、資料は郵送してほしいなと思うんですけども。理由は簡単で、自宅のプリンターが遅いので。

- 事務局：はい、分かりました。
- 会長：この場で、郵送の紙媒体の資料は要らないという方は挙手をお願いします。
事務局、メモしておいてください。
- 委員：それか、後で皆さんにメールで、ご希望の方というふうに……。
- 事務局：はい、分かりました。またこちらから連絡を差し上げますので、返信でどちらがいいというふうに言っていただければ、そのように対応いたしますので、よろしくお願ひします。
- 委員：今聞けばええだけのことじゃないですか。紙媒体で欲しいという人は手を挙げたら、それで済むことで。そんな面倒くさいことせんでも。
- 事務局：じゃ、すみませんが、紙媒体で送ってほしいという方、挙手をお願いします。
(紙で送付希望者挙手)
- 委員：ただ、評価票は……。
- 事務局：はい、評価票はもちろんみなさんに後程お送りさせていただきます。
いいですか。
- 会長：ご協力ありがとうございます。ほかに、進め方についてのご意見は。
もう一つ大事な点があるんですけども、皆さんから出された意見というのを一つにまとめる必要はあるんですか。もしそうだと、多分、私と副会長がそれに目を通して、何か作文せんといかんことになるんですけども、そういう必要はあるんですか。
- 事務局：並列でいいと館長が言っております。
- 会長：じゃ、それを束ねて、委員会の意見とするということですね。
- 事務局：はい、それをお願いいたします。
- 会長：その内容は公開されるんですか、生で。
- 事務局：すみません、前にお示した要領では、公開という形になっております。つまり内部評価と外部評価をくっつけて、中長期の評価報告書という形で外部公開。ただ、その場合、今のように並列で並べるとなると、生で全部いいですよと言っていたか、あるいはこれは公開してくれるなというのが出てくると思うので、そこは調整が必要と思うんですけども。
- 会長：名前を出さずにという方法もありますね、内容だけで。
- 事務局：名前を出さずにというのもありますし、あと生々し過ぎるところはどうしましょうとか、そういうところも含めて若干加工は必要になるのかなと思います。
- 会長：それによって書きぶりが変わってきますのでね。
- 事務局：そうなんです。公開を前提にしたがために、辛辣なことが書けなくなるという

のも問題だと思いますので、ちょっとそこは、公開前提なんですけども、最初はとにかく忌憚のないご意見をいただいて、最終、公開のところでもた調整するという形が必要になるかというふうに考えております。

○委員：委員名は書いて、誰がどう書いたかということは匿名表記でいいのではないかと
思うんですけども。

○事務局：そうです。私たちは、どの委員の方々がこれを書いたかということは知る必要
がありますので、それは書いていただくんですけども、それを報告書の形にまとめる段
階では、そういった名前を伏せるということにします。

○委員：どんな意見があったかということが大事ですよ。

○事務局：はい。

○委員：だから、委員の名前は、これは誰が言ったか分からないけども、これだけの人が
何かを言うたと。その言うたことを並記されるという理解をしているんですけども、そ
れでよろしいですか。

○事務局：多分、そういう感じになるんじゃないかなと思います。

○委員：公開されると、誰が何を言うたかということで、もしネットでそういうのが流れ
ますと、やっぱりややこしいことも生じてきますし、そこはやっぱり匿名で意見を書い
ていただいて、委員の名前は公開ということによっていただくと、自由に物が言えるか
なということを思いますので、委員の一人として、それを希望したいなと思います。

○会長：はい。では、顔ぶれは分かるようにして、誰がどの意見を書いたかは分からない
ような形で公開をするというような感じですかね、方向性としては。

○委員：個人の意見というよりは、委員会の意見なので、個人が何を言うたかということ
よりも、委員会の中でどういう意見があったかということのほうが大事だと思いますの
で、できたらその方向でやっていただければなと思います。

○会長：はい。じゃ、大体段取りはできたかなと思います。委員、どうぞ。

○委員：1つ確認させてください。館長の諮問機関として位置づけられている委員会の評
価が、例えば次年度の予算要求の際に、協議会の意見が何か予算取りの際に出ていった
ことはこれまであるのでしょうか。といいますのは、内部評価に対する意見だけではなくて、
できましたら、私どもは教育のほうにおりますので、例えば今後の教育の現場か
らの意見をまた次年度以降反映していただけるように、積極的な意見も書きたいなとい
うふうに思っております、またそれが予算に反映するといいなというふうに思うんで
すが、特にそういったことがないということであれば、内部評価に対する意見を書かせ
ていただくということにとどめますし、その辺り、ちょっと生のご意見を教えていただ

きたいと思います。

○会長：それはアウトカムということで。

○副館長：少し答えにくいところもあるんですけども、純粹に評価していただいて、その結果それが来年度の私どもなり、教育委員会なりの予算要求につながるようなことであれば、それはそれでもいいですし、そのために意見をいただくということではないかと思っておりますので、そこは自然体でお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。

○山西会長：すみません、時間を超過して申し訳ありません。

大体これでいけそうですか。何か不安なことがありましたら、どうぞ。

○委員：すみません、この内部評価と外部評価をどれぐらいのスパンで今後行っていくことになるのかということをお聞きしておきたいんです。毎年なのか、何年かに1回内部評価をして、次の年に外部評価なのかというのは。今回は2021年度についての評価ということなんですが、先々の見通しをお願いいたします。

○事務局：予定としましては、基本的には毎年度同じように、この時期にご説明させていただきまして、その後、皆さんに外部評価をしていただくというようなスケジュールで考えております。ですから、毎年ということになります。

○会長：よろしいですか。ほかにございませんか。

(2) その他

○会長：そしたら、その他の議題は何かありますか。特にないですか。

なければ、マイクをお返しします。

○事務局：皆さん、いろいろご意見をいただきましてありがとうございます。去年度の内部評価の見直しということも含めてご意見をいただきましたので、もう一度こちらで考え直したいというふうに思います。

この第13期の協議会委員の皆様については、この8月いっぱいをもって任期が終了ということになりますので、今回の集まりが最後の集まりということになります。どうもありがとうございます。それについて館長から一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

○館長：この協議会は2年が1期ということでありまして、そのちょうど区切りであるということでもありますので、この協議会の終わりに当たりまして、皆様方に改めてお礼を申し上げたいと思います。

皆様方には毎回ご多忙の中、時間を割いて本協議会にご出席いただき、本当に親身になってご討議いただきまして、ご意見を頂戴いたしましたことを心より感謝申し上げます。

す。ありがとうございます。

また、本日もいろいろ貴重なご意見をいただきまして、こちらとしては進め方や示し方の問題があつて、終始それを説明しなければいけなかったような状態で、内容のところまではなかなか至らなかったのですけれども、これもだんだん私どものほうもよくなると思っていますので、長い目で見ていただいて、評価というものをうまくやっていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

委員の皆様の中では、山西会長はじめ、土井委員、中坊委員におかれましては、4期8年もの長い間、専門のお立場からご指導を賜りました。

特に山西会長には、加えて会長としての協議会の運営にご尽力いただいたところであります。協議会の規則によりまして、4期以上はお願いできないということになっておりますので、誠に残念ながら、お三方については今回でご退任いただくということになります。ありがとうございました。

また、公募委員の遠藤委員、龍見委員におかれましても、規則上、公募委員の方は1期のみのお願ひということになっておりますので、やはり今回で任期が満了ということになります。お二方からは博物館利用者の立場のみならず、これまでのいろいろなご経験を生かした貴重なご意見を頂戴いたしまして、ありがとうございました。

この協議会で皆様方からいろいろ教えていただいたことで、私たちも自分たちの活動を振り返ることが、おかげさまでできました。そのことによって、地域のため、そして日本の博物館のため、さらにはそれぞれの研究の分野において、わずかばかりであるかもしれませんが、活動を前に進めることができたというふうを考えております。いろいろな評価につきましても、これから私たち、勉強して、より皆様方に評価していただきやすい形で進めていきたいと思ひます。

会の終わりとなり、また甚だ簡単ではございますけれども、皆様の任期の区切りでありますので、琵琶湖博物館を代表いたしまして、委員の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

なお、まだ4期に満たない委員の皆様におかれましては、引き続き委員を継続していただきますことをお願ひ申し添えまして、お礼の言葉を終わりにさせていただきたいと思ひます。ありがとうございました。

3 閉 会

○司会（副館長）：これもちまして、令和4年度第1回琵琶湖博物館協議会を閉会いたします。本日はどうもありがとうございました。

